

「住民みんなで奏でるハーモニー」

胆沢劇場の公演から感じたものは、圧倒的ともいうべき「パワー」でした。

今回の取材をおして、それはきつと、参加している個人それぞれが、自分の出せる力を一杯発揮しているからなのだと納得しました。プロではない市民劇場の魅力は、その「芸術性」よりも、それにかかる「情熱」なのでしょう。そしてこれがまさしく4半世紀にわたり、継続してきた源なのだと感じました。

胆沢劇場を一言で表すなら「住民みんなで奏でる情熱のハーモニー」。

熱演するキャストはもちろん、大道具、小道具、音響、照明、衣装・化粧など、それぞれのスタッフは素人ながら、その持ち場に注ぐのはプロ以上の職人魂。

そしてそれを影で支える「ボランティア」。

26年間毎年楽しみに待っている「観客」。

そのどれか一つが欠けても、公演はここまで続いてこなかったのではないのでしょうか。

一つの公演をやり遂げることは中途半端な気持ちでは成し得ない困難さを伴います。

演じているキャスト・支えるスタッフの思いというものは、表面からは分かりにくそうなのですが、思いのほか、観客にはしっかり伝わるものです。

胆沢劇場の場合、毎年の公演当日、寒い気温の中、開演の何時間も前から列をなす観客の姿が見られます。演じる側の思いがしっかり伝わっているようです。

現在市内に3つの「市民劇場」が刺激し合い、それぞれの持ち味が違う花を咲かせています。中でも胆沢劇場は、文化活動の花開く、奥州市の文化活動の原点であり、リードしていく存在といえます。

植物にさまざまな種類の花があるように、市の市民劇場として、奥州胆沢劇場、奥州前沢劇場、奥州市民☆文士劇がそれぞれの花を思い思いに咲かせています。こんなにも多くの競演が見られる「まち」は岩手県広しといえども、奥州市だけです。

長い冬の季節の終わりを告げる、胆沢劇場。

雪解けを待つ草木が芽吹くように、また、次回公演への一歩が始まります。

